

マルクス・エンゲルス選集

第五卷

フランスにおける階級闘争

ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日

一八四八年の革命にかんする手紙

国際評論

一八四八年の革命——フランス

マルクス＝エンゲルス選集

第 5 卷

マルクス・レーニン主義研究所編

一八四八年の革命

— フランス —

大月書店刊

マルクス=エンゲルス選集

一九五三年十一月三十日 発行

第五卷 定價 四二〇円



編集者

マルクス・レーニン主義研究所

発行者

東京都文京区本郷一丁目一五番地
小林直衛

印刷者

東京都文京区柳町二六番地
山元正宜

発行所

東京都文京区
本郷一丁目一五番地

大

月

書

店

電話小石川 92(三〇九一番)
振替・東京一六三八七番

三晃印刷・田中製本

凡 例

一 原註は（原註1）と、異文考証等についての編集者（訳者）による註は*印で標示し、その註釈文はそれぞれ註を必要とする個所の直後に、訳者による註は（1）（2）等と標示し、その註釈文は（註1）（註2）等として各論文、手紙の末尾に一括し、なお簡単な訳註は「……」として六号活字で本文中に挿入した。原文にある挿入句は（……）で挿入した。

二 原文で一般的に使用されている國語以外の原語は、原則としてその訳語の直後に（……）で挿入した。

三 引用文は「……」で、引用文中の再引用箇所は『……』でしめした。

四 著書、新聞、雜誌その他の出版物の書誌名または著作題名等は『……』でしめした。

五 原文中斜字体イタリックまたは隔字体ガリマールになっている個所は、訳文ではゴチック活字または傍点をつけて標示した。

六 地名、人名はなるべく現地の発音にちかく表記することを原則としたが、従来の慣用をも考慮した。

七 手紙は主題に関係ある部分の抄訳にとどめ、文調も手紙であることに格別の考慮をはらってはいない。

八 本選集の訳文は、それぞれの訳者が担当し、校訂者によって原典と各國語訳とを逐語的に参照し、内容上と用語用上との校訂がなされ、文調にも一應の統一がはかれたうえ、なったものである。

目次 第五卷

一八四八—四九年のフランスの運動

フランスにおける階級闘争 (マルクス)

一 一八四八年二月から六月まで……………	一
二 一八四八年六月から一八四九年六月十三日まで……………	三八
三 一八四九年六月十三日から一八五〇年三月十日まで……………	八二
四 一八五〇年、普通選挙の廃止……………	一二九
ルイ・ナポレオンとフール (マルクス)……………	一四九
『フランスにおける階級闘争』序文 (エンゲルス)……………	一五四
フランスの陰謀家とスパイ (マルクスIIエンゲルス)……………	一八三

國際評論 (マルクス・エンゲルス)

一 「プロシヤ——オーストリア——ロシア——トルコ——イギリス

——スイス——フランス——アメリカ——中國」……………三九

二 「イギリス」……………三八

三 五月から十月まで

一八四三—四七年の産業循環——一八四八年の革命——工業のあた

らしい好景氣(合衆國、ドイツ、フランス)——政治(イギリス、

フランス、ドイツ)——亡命——ヨーロッパ中央委員会の宣言……………三三

反動期とその戦術

ルイ・ナポレオンのブリュメール十八日 (マルクス)……………二八

『ブリュメール十八日』再版序文（マルクス）	四二一
『ブリュメール十八日』第三版序文（エンゲルス）	四二五
エンゲルスからマルクスへの手紙（一八五一年十二月三日）	四二八
昨年十二月にフランスのプロレタリアートが比較的 受動的だったことの眞因（エンゲルス）	四三三
一八五二年における神聖同盟の対フランス戦争の可能と前提（エンゲルス）	四四七

一八四八年革命の教訓についての手紙から

一 マルクスからワイデマイヤーへ（一八五二年三月五日）	四八五
二 エンゲルスからマルクスへ（一八五一年五月二十三日）	四九〇
三 エンゲルスからマルクスへ（一八五一年七月下旬）	四九三
四 エンゲルスからマルクスへ（一八五二年九月二十四日）	四九六

五	マルクスからエンゲルスへ（一八五六年四月十六日）……………	四九七
六	マルクスからエンゲルスへ（一八五六年十二月二日）……………	五〇〇
付	『ピープルス・ペイパー』創立記念祝賀式の演説（マルクス）……………	五〇三

一八四八—四九年のフランスの運動

フランスにおける階級闘争 (マルクス)

一 一八四八年二月から六月まで

——『新ライオン新聞政治経済評論』一八五〇年第一号所載——

わずかな数章をのぞいては、一八四八年から一八四九年までの、革命年代記の比較的重要な各節はいずれもつぎの見出しをもっている。すなわち、革命の敗北！

これらの敗北において、うちたおされたものは革命ではなかった。それは前革命的・傳統的付随物であり、まだはげしい階級的対立にまで尖鋭化していなかった社会諸関係の諸結果であった。すなわち、二月革命いぜんの

革命政党が脱却していなかったところの、人物や幻想や観念や計画であった。そして、それらのものから革命党を脱却させることのできたのは、二月の勝利ではなくして、ただ一連の敗北だけであった。

一言でいえば、革命の発展は、その直接的な悲喜劇的な勝利の成果のなかにではなくて、逆に密集した強力な反革命をうみだすこと、すなわち敵をうみだすことのなかにその進路をきりひらいてすすんだのである。その敵をうちたおすことによってはじめ、革命党はほんとうの革命的な政党に成長するのである。

このことを証明するのが以下の文章の課題である。

一 一八四八年六月の敗北

七月革命ののち、自由主義的な銀行家ラフィット⁽¹⁾が、彼のなかまのオルレアン公を案内して、市廳^{オテル・ド・ヴィル}舎へはいってゆくとき、彼はつぎのことばをもらした、「これからは銀行家が支配するだろう。」ラフィットは革命の秘密をもらしたのである。

ルイ・フィリップ治下でフランスを支配したものは、フランスのブルジョアジーではなくて、ただその一分派にすぎなかった。すなわち、銀行家、株式主、鉄道主、炭坑、鉄鋳、大森林の所有主や彼らとむすぶ地主の一部——つまりいわゆる金融貴族であった。これが玉座にすわって議会で法律を口授し、内閣から煙草專賣局にいたるまでの公職を授與した。

ほんとうの産業ブルジョアジーは、公的な反対派の一部となっていた。すなわち、彼らは議会における少数派

にすぎなかった。彼らの反対は、金融貴族の独裁がいよいよはっきりしたかたちに発達するにつれて、しかも彼ら自身が一八三二年、一八三四年、一八三九年の血のなかに圧殺された暴動の⁽²⁾のちに、労働者階級にたいするその支配が確実化されたといよいよ妄想するにつれて、ますます決然たるものとなった。のちの憲法〔制定〕議会でも立法議会でもブルジョアの反動のもっとも狂信的な代表者であった、ルーアンの製造業者グランドン⁽³⁾は、代議院においてはギゾー⁽³⁾のもっとも激烈な敵手であった。のちにフランス反革命のギゾーになりあがりとしてたよりない努力をしたので名をしられた、オン・フォージェ⁽³⁾は、ルイ・フィリップの末期には、産業のために、投機とそのお据持の政府に抗して論陣をはったものだ。バステア⁽⁴⁾はボルドーおよびフランスのぶどう酒の産地全部を代表して、現行制度に反対の煽動をおこなった。

すべての階層の小ブルジョアならびに農民階級は、完全に政治的権力からしめだされていた。最後に、公的な反対派であるか、もしくは法的な領域 (pays légal) のまったくそとにあったものに、前述の諸階級の理論的代表者と代弁者、その階級の学者、弁護士、医師、その他一言でいえば、その階級のいわゆる専門家がいた。七月王政は、その財政窮乏のために、はじめから大ブルジョアに依存していた。ところが大ブルジョアに依存していることが財政窮乏の増大することの無制限の源泉となった。予算の均衡を回復しないで、すなわち國家の支出と収入との均衡をはからないで、國家の行政を國民の生産の利益にしたがわせることはできない。ところがこの予算の均衡をはかることが、國家の支出を制限しないで、すなわちその一つ一つが現行制度の支柱となっている利益を侵害しないで、また租税のふりあてをあたらしく規定しないで、すなわち租税負担のおもな部分を上層ブルジョア自身の肩に轉嫁しないで、どうしてそれができるだろうか？

國家の負債はむしろ議會をつうじて支配し立法しているブルジョア分派の直接の利益であつた。國庫の欠損、これこそまさに彼らの投機の本來の對象であつて、彼らが富をうるために主役をえんじたものであつた。一年ごとにあたらしい欠損、四年もしくは五年ごとにあたらしい國債。そうしてあたらしい國債募集のたびごとに、人工的に破産のせとぎわにおかれた國家から金融貴族が詐取するあたらしい機會があたえられた。すなわち、國家はもっとも不利な條件下に銀行家と契約しなければならなかつたのだ。そして國債のたびごとに、その資本を國債に投じている民衆を、株式賣買の操作によつて收奪する第二の機會があたえられた。——その株式操作の秘密に政府と議會の多數派はつうじていたのだ。一般に國家信用の不安定狀態と、國家の機密をにぎっていることは、銀行家と議會および玉座にいる彼らの一味に、國債の相場に異常な突然の変動をおこさせる可能性をあたえた。そしてその結果はいつもきまつて、大量の中小資本家が破産し、大投機師がまるでおとぎばなしのように急激に金持になることであつた。國庫の欠損が支配的ブルジョアジーン分派の直接の利益であつたとしたら、ルイ・フィリップ治世の後年に、國家の臨時支出が、ナポレオン治下の國家臨時支出の二倍をはるかにうまわつたこと——それどころか、フランスの毎年の輸出總額はめつたに平均七億五千万フランにたつしなかつたのに、この臨時支出は年々ほとんど四億フランにたつたといふことにふしぎはないのである。このように國家の手をとおしてながれだした莫大な金額は、おまけにいんちきな納品契約、賄賂、公金私消、あらゆる種類の詐欺行爲の機會をあたえた。國債をつうじて大規模におこなわれた國家からの詐取は、細部においても國家事業においてくりかえされた。議會と政府との關係は、そのまま個々の行政官廳と個々の企業家との關係として幾層倍にもなつてあらわれた。

支配階級は一般に國家の費用と國債とを食いものにしたように、鐵道建設事業を食いものにした。議會は、おもな負担は國家におっかぶせておいて、投機をおこなう金融貴族には黄金の^み実を保証した。たまたまばくろした代議院におけるつぎの醜事は人の記憶するところである。すなわち、一部の閣僚をふくめて多数派の全議員が、あらかじめある鐵道建設事業に株主として参加しておいて、のちにそのおなじ事業を、立法者として、國費をもつて実現させたことである。

これに反してきわめて小さな財政的改革も銀行家の妨害でだめになった。その一例は郵便改革である。ロートシルト（ロスチャイルド）は抗議した、國家はたえず増加している國債の利子を支拂うための収入源（郵便事業）を縮小してよいのか、と。

七月王政は、フランスの國富を食いものにするための一株式会社にはかならなかった。——その配当金は、大臣、議會、二十四万人の選挙人、および彼らの子分のあいだに分配されたのである。ルイ・フィリップは、この会社の支配人であり、玉座にすわったロベール・マケール⁽⁵⁾であった。商業、工業、農業、海運業、すなわち産業ブルジョアジーの利益は、この制度のもとで、たえずおびやかされ損害をこうむらなければならなかった。「やすあがりの政府（gouvernement à bon marche）」と産業ブルジョアジーは、七月革命のときにも、その旗のうえにしるしたものであった。

金融貴族が法律をつくり、國政を指導し、組織された公的権力の全部を行使し、事実と新聞とによって世論を支配しているあいだに、宮廷からあいまい飲み屋にいたるまでのあらゆる領域に、おなじ賣淫、おなじ恥しらずの欺瞞、生産によらないで、ありあわせの他人の富をくすねとて金持になろうとするおなじ病癪が、くりかえ

してあらわれた。とくにブルジョア社会の最上層では、不健康で放埒な欲望を各瞬間にブルジョアの法律に抵触してさえも無制限に貫徹させようという傾向があらわれた。そしてその場合、賭博から生じる富はもちろんその満足をもとめ、その享樂は耽溺的 (crapuleux) となり、そして金銭と汚物と血とが合流していた。金融貴族は、その金もうけのしかたも享樂も、ブルジョア社会の上層に再生したルンペン・プロレタリアートにすぎないのである。

そして支配者となっていないフランス・ブルジョアジエの分派はさげんだ、腐敗だ！ と。一八四七年にブルジョア社会のもっとも崇高な舞台のうえで、ただのルンペン・プロレタリアートがそんなことをやればきまって娼家や貧民院や癲狂院へおくりこまれ、裁判所や徒刑場や死刑台へとみちびかれるようないんちきが、公然と上演されたときに、民衆は、大泥棒をたおせ！ (à bas les grands voleurs !) 人づろしをたおせ！ (à bas les assassins !) とさげんだ。産業ブルジョアジエは彼らの利益がおびやかされているのをみた。小ブルジョアは道徳的に憤怒した。民衆の感情は激昂した。パリはパンフレットの洪水であふれた。——ロートシルト王朝、当代のユダヤ國王 (la dynastie Rothschild, les juifs rois de l'époque) 等々——それらのパンフレットは多少とも才氣があつて、金融貴族の支配を告発し、罪の焼印をおしていた。

名声は一文にもならない！ つねにいたるところに平和あれ！ (Rien pour la gloire ! La paix partout et toujours !) 戦争は三分利つき公債および四分利つき公債の相場を下落させる！ と、株式ユダヤ人のフランスは、その旗のうえにかいた。彼らの对外政策は、したがって、フランス人の國民的感情を幾度かきつづいてきつづける結果となった。その國民的感情はオーストリアのクラカウ合併によってポーランドにたいする掠奪

が完成されたとき、それからまたギゾーがスイスの分離派戦争において積極的に神聖同盟がわに加担したとき、ますますはげしくわきたった。この外見だけの戦争におけるスイスの自由主義者の勝利は、フランスのブルジョア反対派の自負心をたかめ、バレルモの民衆の流血的暴動は、無力化されていた人民大衆に電撃のように作用して、彼らの偉大な革命的思い出と情熱とをよびさました。(原註)

(原註) 一八四六年十一月十一日ロシアとプロシヤの諒解のもとにオーストリアがクラカウを合併。

一八四七年十一月四日より二十八日までのスイス分離派戦争。

バレルモの暴動、一八四八年一月十二日。一月末の九日間ナポリ人は同市を砲撃した。(エンゲルスの

脚註)

最後に、一般的な不満の爆発をはやめ、不平を反乱にまで成熟させたものは、二つの経済的な世界的事件であった。

一八四五年と一八四六年の馬鈴薯病と不作は、人民のあいだの一般的激昂を増大した。一八四七年の物價騰貴は、フランスでもその他の大陸「諸國」でも、流血の紛争をひきおこした。金融貴族の恥しらずの酒宴に対比して、人民の第一の生活手段を獲得するための闘争！ ビュザンセーでは飢餓の一揆が死刑にされ、パリでは飽食した詐欺師どもが王族によって裁判からたすけてもらった！

革命の勃発をはやめた第二の経済的大事件は、イギリスにおける一般的な商工業の恐慌であった。それはすでに一八四五年秋の鉄道株投機者の大量的な破産に予告されていたが、一八四六年中はさししまった穀物関税廃止のよりな一連の偶然の事項によって延期されてのち、ついに一八四七年秋になるとロンドンの大きな植民地貿易

商の破産となつて爆発した。それにつづいて地方銀行の破産、イギリスの工業地帯の工場閉鎖がくびすを接しておこつた。大陸では、この恐慌の余波は、二月革命が勃発したときにはまだ完全には征服されていなかった。

この経済疫病による商工業の荒廢は、金融貴族の独裁をいっそうがまんのできないものにした。フランス全國において政府反対派のブルジョアジーは、選挙法改正のための懇親会のアジテーションをよびおこした。その選挙法改正によつて彼らは議会の多数を獲得し株式の内閣をたおそうといふのであつた（本選集第二卷二八四頁以下参照）。パリでは産業恐慌はなお特殊的につきのよゝな結果をうんだ。すなわち、現在の状態ではもう外國市場で商賣をすることができなくなつた多数の工場主と大商人を國內商業にむかわせたことである。彼らが大きな商店などを開設したので、その競争のために雜貨商や小商人は大量的に破産した。だからパリ・ブルジョアジーのこの部分に無數の破産者がでたのであり、だからまた彼らが二月に革命的に行動したのだ。ギゾーと兩院が、この革新の提議に明白な挑戦をもつて應答したこと、ルイ・フィリップがバロー内閣の任命を決意したときはすでにおかれていたこと、人民と軍隊とのあいだに格闘がおこつたこと、軍隊が國民軍の消極的な態度によつて武装を解除されたこと、また七月王政が臨時政府に席をあけわたさなければならなかつたことなどは、周知のことである。

二月のバリケードのうゑにたちあらわれた臨時政府は、その構成上に必然的にこの勝利をわちあつた種々の党派を反映してゐた。臨時政府は七月王座を協力してたおしたが、その利害關係は相敵対してゐた種々な階級の妥協以外のものではありえなかつた。その大多数はブルジョアの代表者からなりたつてゐた。ルドルユローラ(7)とフロコン(8)に代表される共和主義的小ブルジョア層、『ナシオナル』紙の人々に代表される共和主義的ブルジョア層。

ジョージ、クルミュー⁽⁹⁾、デュボン・ド・ルール等々に代表される王朝的反対派。労働者階級はわずかに二人の代表者、ルイ・ブラン⁽¹⁰⁾とアルベール⁽¹¹⁾を有するだけであつた。最後にラマルテイエマ⁽¹²⁾の臨時政府内における存在は、さしあたりなんらのほんとうの利害も、なんらの一定の階級も代表していなかった。それは二月革命そのものであり、その幻想とその詩とその空想的 content と空辞とをもつた共同の蜂起であつた。とにかく、二月革命のこの代弁者は、その立場からみても思想からみても、ブルジョアジーにぞくしていた。

政治的中央集権の結果としてパリがフランスを支配するとすれば、革命の地震の瞬間には労働者がパリを支配する。臨時政府の最初の生命活動は、酔ったパリから、しらふのフランスへうつたえることによって、この圧倒的な影響力からのがれようとするところみであつた。ラマルテイエマはバリケードの戦士らの共和制を宣言する権利に異論をとなえて、その権利はフランス人の多数だけがもっており、彼らが投票によってそれをきめるべきである、パリのプロレタリアートは寡奪によって勝利をけがしてはならない、と主張した。ブルジョアジーはプロレタリアートにただ一つの寡奪だけをゆるすのだ、——すなわち戦闘の寡奪だけを。

二月二十五日の正午には共和国はまだ布告されていなかった。ところが、全閣僚の椅子は、臨時政府のブルジョア分子のあいだに、そして『ナシオナル』の將軍や銀行家や弁護士⁽¹³⁾のあいだにもう配分されていた。しかし労働者は、こんどは一八三〇年七月とおなじようなごまかしはゆるすまいと決心していた。彼らはあらたに戦闘を開始し、武器の力によって共和制を強制的に獲得するつもりでいた。この使命をおびてラスバイユ⁽¹³⁾は市廳舎におもむいた。パリ・プロレタリアートを代表して、彼は臨時政府に、共和制を布告せよ、と命じた。もし人民のこの命令が二時間以内に実行されないならば、彼は、二十万人の先頭にたつて、またここにもどってくるであらう。